

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月11日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03001

研究課題名（和文）植民地期北スラウェシの農業開発とグローバルヒストリー

研究課題名（英文）Agricultural Development in Colonial Minahasa and Global History

研究代表者

太田 淳（Ota, Atsushi）

慶應義塾大学・経済学部（三田）・准教授

研究者番号：50634375

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：蘭印経済史の先行研究は強制栽培制度とそれに引き続く自由主義経済を異質で断絶したものと捉える傾向が強く、そのため植民地期北スラウェシでも、強制栽培制度下のコーヒー生産とその後の時期に農民主導で行われたココヤシ生産は非常に断絶したものと考えられていた。それに対し本研究は、これらの製品の生産が密接に関連していたことを明らかにした。そのことは、コーヒー強制栽培制度が浸透したことによってコーヒー生産地でココナツへの需要が高まったこと、コーヒー輸送のために整備された道路や牛車がココナツ運搬にも利用されたこと、コーヒー栽培を契機に土地の個人所有が進み、後にココヤシ栽培にも利用されたことから確かめられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、今まで断絶したものと捉えられていた蘭領東インドの強制栽培制度と農民による自主的な輸出作物生産を、互いに強く関連するものと捉え直した。強制栽培制度の中にも農民が自らの利益拡大に努める機会があり、政府が主導して整備したインフラ（道路など）は、その後の農民主導の輸出作物生産にも大きく貢献した。政府による強制と農民の自主性を峻別する視点は、現実の把握のために有効ではない。歴史的に確かめられたことは、政府主導のインフラ整備は、民間の需要や起業家精神と結びついた時に高い効果を生むことである。政府による労働強制は現代では論外であるが、このような政府と民間の関係は現代社会にも有効であろう。

研究成果の概要（英文）：In colonial North Sulawesi, coffee was produced under the Cultivation System, while coconuts were cultivated on the spontaneous will of local people. Previous studies have understood that they were produced under very different economic systems, reflecting a general trend to understand the Cultivation System and the following liberal economy as very different and discontinued phases. This research, however, argues that the production of these two cash crops were strongly related to each other, from the following reasons. Early demand for coconuts emerged from the coffee-producing region; Roads and other transportation facilities were organized under the Cultivation System for the smooth transportation of coffee, but transporters made use of them for coconuts; people came to possess lands individually and exclusively through coffee cultivation, and they later made use of their lands for coconut cultivation.

研究分野：東南アジア史

キーワード：農業開発 コーヒー ココヤシ スラウェシ 蘭領東インド 植民地経済

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

先行研究は、東南アジア植民地期の農業開発は欧米の植民地政府または民間企業に主導されたと強調することが多く、最近になってようやく米や胡椒など中国向け輸出品を現地農民が自発的に生産したことが議論されるようになった。しかし本研究が扱うオランダ領東インド（以下、蘭印）・北スラウェシ地方は、コーヒーおよびコブラ（ココナツの果肉を乾燥させたもので、石鹼やマーガリンの原料となる）を欧米向けに輸出する主産地となった。地域社会がどのようにしてこのような輸出品を生産し、世界市場と結合したかはまだ明らかでない。また、北スラウェシでは、強制裁培制度下でコーヒーが生産され、続く時期に農民主導でココヤシが生産された。先行研究ではこれらの2大産品が非常に異なる体制で生産されたと考えられてきた。このことは恐らく、蘭印経済史全体において、強制裁培制度とそれに引き続く自由主義経済を、非常に異質で断絶したものと捉える傾向が強いことと関連している。

2. 研究の目的

北スラウェシにおける輸出作物生産に関して以下の問題を検討し、蘭印における農業生産が、強制裁培制度から自由主義経済へと断絶的に移行したという理解に再考を促す。

- (1) 農民主導の農産物輸出はどのような生産構造によって可能となったか
- (2) 強制裁培制度が実施されたコーヒー栽培において、何が生産増をもたらす要因となったか
- (3) 小農生産が卓越したココヤシ栽培は、コーヒー強制裁培とどのように連続していたのか

3. 研究の方法

- (1) オランダ国立公文書館、インドネシア国立公文書館に所蔵される植民地政庁資料を収集・分析し、植民地期北スラウェシにおける農業開発の展開を整理する。
- (2) 上記資料の数値データをGIS（地理情報システム）の手法で分析し、輸出作物生産の展開を地図上で示し検討する。

4. 研究成果

(1) 北スラウェシのコーヒーは基本的に強制裁培制度下で生産されたが、1850-60年代には自主栽培制度が導入されて生産が拡大したことが確かめられた。住民は自宅近くに小規模の農園を開き、施肥や運搬を容易にした。

(2) 自主栽培が行われた時期に政庁は、運搬に特化する農民に賃金を支払い、分業を促進することで輸送の効率化を図った。運搬業者は海岸の港までコーヒーを運んだ後、帰り荷として様々な商品を内陸部生産地に持ち帰った。運搬業者は2輪の牛車を用いたが、彼らに牛や牛車を提供するのには、一定の資金を持つ現地首長であった。こうしてコーヒーの自主栽培を通じ、北スラウェシでは分業と商品経済化が進行した。

(3) トンダノ県の内陸高地では、厳しい強制によって1850-60年代にコーヒー生産が増加した。灌漑水田が発達し人口が稠密なこの地域では特に強い労働供出義務が課されたが、農民はコーヒー生産と米生産の両方を拡大した。彼らは人口を増やし米生産を増加させることによって、コーヒー農園の労働力と労働者の食料を確保した。また、水車など稲作用の施設をコーヒー豆の皮むきの作業にも用いるなどして、米とコーヒー生産の組み合わせを試みた。

(4) 一方で、本来コーヒー生産に向かない低地でも、アムラン・マナド・ケマ各県の海岸部などにおいてコーヒー生産が行われた。アムラン海岸部の農園では、首長の強制によってコーヒーが栽培された。しかしそうした強制のなかったマナド県やケマ県でも、政庁の禁止をかいくぐって農民が個別に海岸部でのコーヒー生産を拡大させた。これは、市場価格の上昇に加え、土地を開拓することによって、その土地の排他的所有権を主張できたことが大きな動機となっていた。

(5) 政庁は、自主栽培や運搬業の専門化を進めた1850-60年代に、道路の建設と補修にも取り組んだ。牛車が利用可能な道路は、特に1860年代半ばから広がった。アムラン県では当初海岸部でコーヒーが栽培されていたが、新設された道路に沿って内陸部まで生産地が拡大した。つまり、道路の建設がコーヒー栽培を刺激したと言える。また新たなコーヒー園では自主栽培が多く行われたことから、農民の利潤拡大要求が強まっていたと言える。

(6) コブラ輸出が1890年代から拡大することからココヤシ栽培も同時に増えたと考えられていたが、実際には1850年代から増加していたことが確かめられた。当初はコブラとして輸出されるのではなく、ココナツまたはココナツオイルとして北スラウェシ域内で消費された。最大の消費地はトンダノ県で、コーヒー生産を通じ人口と現金収入が増え、かつ米とコーヒー以外の農業生産が困難になったことから需要が生じたと考えられる。また、女性の授乳時間が取れないことから乳児への代替食の材料にされた可能性もある。こうした需要の増大によって価格が上昇し、他県での生産を刺激した。域内ではココナツを含む多様な商品が流通するようになったが、これはコーヒー輸送用に整備された道路や輸送インフラが利用されたためである。

(7) これらのことから、強制裁培制度下のコーヒー生産と農民が自発的に生産したココヤシ栽培とは、強く関連していたことが確かめられた。すなわち、コーヒー強制裁培制度の浸透のために、コーヒー生産地でココナツへの需要が高まり、コーヒー輸送のために整備された道路・牛車がココナツ運搬にも利用され、コーヒー栽培を契機に土地の個人所有が進み、後にココヤ

シ栽培に転換したのである。また、ココヤシは当初は域内消費用に生産されたが、このことが輸出向けに栽培を拡大する基盤を確保した。蘭印経済史では、強制栽培制度と自由主義経済は全く別の形態であったと考えられる傾向があるが、この2つの体制はむしろ連続したものと考えられよう。というのは、強制栽培制度下で政庁が主導して整備したインフラが、農民の商業的生産に貢献したこと、農民は強制栽培を通じ、価格上昇に伴う利益を知ったこと、強制栽培制度下でも土地を個人所有する慣習が自主栽培の拡大(利益の最大化)を生んだこと、強制栽培制度が作り出した分業化が、商品作物への需要を地域にもたらしたことが確かめられるからである。強制栽培制度下でも商業的刺激はあり、強制栽培制度下で整備されたインフラは自由主義経済のもとで農民が主導的に商業作物生産を発展させる際にも有効だったと言える。

(8)以上の研究成果は、以下の既刊論文に加えて、現在投稿して査読結果を待っている拙著「19世紀半ばの蘭印・北スラウェシにおける商業作物生産-強制栽培制度下におけるコーヒーとココヤシ栽培の農民主導型発展-」『社会経済史学』(2019年3月31日投稿済)でも論じている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Atsushi Ota. 2019. "Role of State and Non-State Networks in Early-Modern Southeast Asian Trade." In Kaoru Sugihara and Keijiro Otsuka (eds.), *Paths to the Emerging State in Asia and Africa*. New York: Springer, pp. 73-93. (査読無し)

太田淳. 2018. 「19世紀半ばにおけるインドネシア・北スラウェシの社会変容-コーヒー生産の展開と貨幣経済の深化-」『三田学会雑誌』111-1: 17-50. (査読無し)

太田淳. 2018. 「インドネシア・北スラウェシにおけるコーヒー栽培-19世紀半ばにおける「自主栽培」の発展と貨幣経済の深化-」秋田茂編著『「大分岐」を超えて-アジアからみた19世紀論再考』ミネルヴァ書房, pp. 179-218. (査読無し)

〔学会発表〕(計8件)

太田淳「19世紀半ばの蘭印・北スラウェシにおける商業作物生産-強制栽培制度下におけるコーヒーとココヤシ栽培の農民主導型発展-」経済史研究会, 東京大学大学院経済学研究科, 2019年6月3日.

Atsushi Ota, "From coffee roads to coconut roads: Expansion of cash-crop cultivation and development of transportation system in Mid-19th-century Minahasa," International Workshop "Minahasa in History: Reconsideration of its Social Dynamisms during the Colonial Era," Keio University, 13-14 January 2019.

Atsushi Ota, "Development of Coffee Cultivation and Road Construction in 19th-century Minahasa, Dutch East Indies," WEHC 2018 Boston, Panel "Labor, Technology, and Institutions in Global Commodity Chains: 16th-19th Centuries," August 2, 2018, MIT, Boston, MA.

太田淳「19世紀半ばの蘭印・北スラウェシにおける商業作物生産」社会経済史学会第87回全国大会, パネル「熱帯と一次産品輸出」, 大阪大学, 2018年5月26-27日.

Atsushi Ota, "Continuing Trade, Changing States: Reconsideration of the Transitions in Maritime Southeast Asia, 1750-1870," Global History and Hybrid Political Economy in Early Modern Eurasia, c. 1550-1850, the University of Tokyo, 21-22 April 2018.

Atsushi Ota, "Role of State and Non-State Networks in Early-Modern Southeast Asian Trade," International Workshop on Emerging States in Global Economic History (2), Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), March 26, 2018.

太田淳「島嶼部東南アジア経済における近世と近代-地域間貿易システムの変容とレジリエンス」経済史研究会, 東京大学経済学研究科, 2017年6月26日.

Atsushi Ota, "Development of Cash-crop Production in Colonial Minahasa: Non-Plantation Cultivation of Coffee," Conference "Maritime Worlds Around the China Seas: Emporiums, Connections and Dynamics," Academia Sinica, Taipei, 31 August -1 September 2016.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。